愛知産業大学言語・情報共育センター

時間：09:30-10:30　天候：雨のち曇り

■第一印象について

伊藤：愛知産業大学の中にある、studio velocity 設計の言語・情報共育センターを見学しました。“JIA 新人賞（2016）”を受賞している作品です。

　コンセプトによると、約 3500 ㎡程度の土地の中に、用途としては 500 ㎡程度の機能が備わるという与件でした。それを一か所に集中するのでなく、機能を分散配置することで、屋内外を通して敷地全体を建築化していこうとするもの。メインはそのようなコンセプトであると考えます。実際に見て思ったことは、幌があって空間が点在しており、外と内のつながりが感じられました。村上先生いかがでしょうか。

村上：愛知産業大学キャンパスのマスタープランは、校舎が真ん中の広場を囲うというコンセプトでつくられていますが、中央の広場が機能していませんでした。それを上手く読み取っていますね。以前は崖があったのでしょうか。

恒川：以前は段差が 4m と分断されていましたが、解消するためになだらかな斜面にしていますね。

村上：広場を広場としてしっかりと再生したことについて、マスタープランをリスペクトし、うまく敷地をリノベーションしているな、という印象があります。それがよくわかるのが上から見下ろしたときですね。グランドレベルだけでなく、窓やテラスなど様々な角度から見る景色もよかったです。

伊藤：グランドレベルからだと、ランダムな空間に見えましたね。メインのバス停と大学施設を一つの道でつなげるといったメインの軸線はしっかりとしていて、そのような中でシーンができている点が素晴らしいと思います。一方、構造もランダムに見えますが、見下ろすと軸線が決まっていました。柱を並べるところ、並べないところのバランスが心地よかったです。

■空間について

村上：与件や意図を受け止め、この建築を実現した建築家も素晴らしい一方で、依頼した愛知産業大学も素晴らしいと思いますね。これはコンペが行われたんでしょうか。

恒川：プロポーザルが行われました。普通に建物をつくると、建築面積はもっと小さく、周囲にぽっかりと空間が空いてしまうところを、外部空間も取り込み建築することを選択したことですね。

村上：コストダウンするための努力を設計者が相当努力されたのでしょう。建築のイメージとしては、オーストラリアの建築家でプリツカー賞を受賞した“グレン・マーカット”が連想されます。軽快な建築をつくっていて、ローコストで優れた美しい空間を構成しており、その系譜を感じます。

伊藤：私はこの愛産大言語・情報共育センターは建築ではないと考えています。一番初めに幌がつくられ、ヴォイドとなるランドスケープの部分がつくられていますよね。すなわち、構造も幌に合わせてつくられ、教室などの空間が付随していて、一般的な図と地の関係が逆転しています。なので、天気の良い日に開口部の窓をすべて開け放つと、ランドスケープと一体化するかのように感じられるのでしょう。

■構造や構法について

村上：なるべく構造を意識させず、消したかったという意図があるのではと思います。また構造の消し方をスタディされたのだろうなという苦心がうかがえますね。

伊藤：そういう意味では、上から見たときの記号的なかたちにこだわっているのかもしれないですね。一方、1本ずつの柱はあまり細くはなく、屋根スラブの厚みを見せ屋根をくっきりとみせることで、柱が細く空間が軽快に見えるといった見解もあるのではないでしょうか。

村上：その意図はわかりますが、厚みを持たせた結果、上から見た記号的で美しい屋根に対して、グランドレベルに立ったときのケラバの処理が気になりました。樋がない建築なのでケラバのラインが良く見えますよね。若干の雨のたれがあり、ケラバの汚れが目立ってしまっているので、水切り部分をシャープにつくり、下部に犬走りを設けるのが構法上合理的であると感じました。

恒川：犬走りを設けないことや、芝生の上に掘立柱のように建つ柱など、まるで学生がつくる模型のように建物を立ち上げることをいかに実現しようか、サッシュの扱い一つとってもよく考えられていますね。

村上：また、コーナーウィンドウが効いていますね。通常、角には構造の受けがあるので、それがないことでコーナーウィンドウを開け放った時の開放感が増しています。

■環境設備について

恒川：仕上げがないので、夏は暑く冬は寒いなどの懸念はありそうです。過ごしやすい季節、良い天気の日はともかく、日常的にどのように利用されているのかを見てみたいですね。

伊藤：建築としてみると、環境スペックが気になりますが、公園の中の休憩所のような、ランドスケープとともに公園をデザインしているとみると、心地良い場所がつくられているのではないでしょうか。

村上：気になるのが造作の棚や空調ですね。既製品の空調機は表と裏があるので、その処理をランドスケープ的に配置すると、伊藤先生のおっしゃられるような意図が強調されたかなと思います。

恒川：家具はよくても、空調機は付けてはいけない気がします。照明のスイッチの取り付け方はよかったですね。

村上：照明のスイッチを基本形に、”オットー・ワグナー”のウィーン郵便貯金局のようなイメージで空調を収められるといいのですが、個別空調なので限界がありますね。マス・プロダクションの建築における限界でもあります。設備に予算をつぎ込めると、建築家としてはより理想的なランドスケープができたかもしれません。

伊藤：室外機の集約・吹き出し口など、設備の考え方については設計者に直接お聞きしたいですね。

■インテリアについて

伊藤：ランドスケープ的な建築だと申しましたが、トイレなど拠点となっている部分は明快なインテリアとなっていました。そちらについてはどのように捉えられていますか。

恒川：studio velocity の建築では、住宅などでもかわいらしい家具やインテリアを施していますね。

伊藤：アイアンを用いているなどもかわいらしい点ですが、大理石調のタイル、その裏にブレースが隠れており構造の処理も行っているのでしょう。しかし、空間の中に空間がコアとしてしっかりとつくられているので、家具のようにポンと置かれているだけでも良かったのかなと思います。全体が素晴らしい分、そのような点が気になってしまいました。

村上：あとは中央の椅子が並べられた講義室と中庭が連続する中で、中庭がすべて同じようなランドスケープになっているので、もう少し違う種類の中庭を配置するような予算があれば、工夫の余地があったのではないかと感じます。

伊藤：バス停側ではあえて起伏をつけており、人が溜まれる場所もありましたね。

村上：人が溜まれる場となっているので、内部空間とより連続して使うことのできる設えとする点で、中庭の設えにもっと建築家が関与してもよかったのではないかと思います。

伊藤：しかし建築家が過剰に物事を決定してしまうのは、“妹島和世”や“石上純也”などから受け継がれている建築スタイルを失うことになりそうですね。

■設計者の系譜と設計手法について

村上：同じ大学施設である“石上純也”の神奈川工科大学 KAIT 工房を、どのように再解釈しているのかを設計者に伺いたいですね。あとは、方位の解釈ですね。東側が低く西側が高い斜面を、屋根の傾斜も含めてどのように取り入れようとしたのかも、伺いたいです

ね。

伊藤：“妹島和世”や“石上純也”などから受け継がれている建築スタイルからすると、日光に対して庇を出すことやルーバーを取り付けるなどの処理は考えていないと思いますがいかがでしょうか。

村上：考えていないでしょうね。屋根の傾斜とボリューム配置で解いています。

恒川：屋根の傾斜も、今のものが唯一の解決方法なのではないでしょうか。

村上：上から見た景色をフラットに見せようとするとあのような屋根になりますよね。そこは悩ましいところです。

伊藤：まるで“ロラン・バルト”の記号論のようでしたね。どこから見ても建築が記号として見え、それが象徴的であるため学生たちが知らず知らずのうちにここへ誘われているのかもしれません。

■今後のキャンパス計画について

村上：あとは周囲の校舎ですね。周囲の校舎に対して、この建築に吸い寄せられるようなリノベーションを数十年後に行えると、周囲と相まってより良い建築になると思います。

恒川：現在校舎を繋いでいる渡り廊下のつくられ方が、この建築と呼応してくると全体として一体感のある大学施設になりそうですね

伊藤：愛知産業大学として、もっとこの建築の価値を上手く利用し、周辺整備もしていった方が相乗効果を生みだすでしょう。

岡崎市図書館交流館りぶら

時間：11:00-12:00　天候：曇りのち晴れ

■第一印象について

伊藤：岡崎市図書館交流館りぶらを視察しました。りぶらは、竣工までの4年間を“延藤安弘“先生が市民参画し、ワークショップを繰り返しながら、市民のニーズや街の課題点を補うように計画を積み上げてきました。その成果が、街の交流拠点として実現しており高い評価を得ています。街、周辺との関係性については前面の伊賀川やお堀との関係、岡崎城に対する軸線などといった点に重きを置いてつくられていると思います。実際にご覧になってみていかがでしたか。

村上：水辺との関係はしっかりと考えられていますね。また水辺に至るまでのアプローチがいくつもあり、中央のお堀通りとオープンテラス側（東側）のエントランスまでのアプローチも上手くつくられていますね。岡崎という街において、本来この建築は、お堀通りとエントランスを抜け、市の中心地までつながっていくイメージだったのではないでしょうか。

恒川：そうですね。りぶらから国道 1 号線を市役所側へ少し進んだあたりにデパートなどがあり、市の中心市街地となっていました。しかし、デパートなどが撤退していく中で、りぶらが公共施設としてポツンと残ってしまったという印象もあります。本来なら市の中心地と密接につながっていたと思われます。

村上：エントランス側には、大きな駐車場がありましたね。

伊藤：その隣接している駐車場に向けて開くようにエントランスと中央部のお堀通りがつくられています。

村上：エントランスが街を引き込むようにハの字型に開いているのはよかったですね。

伊藤：エントランスの使われ方としては、音楽イベントや市場、マルシェを開催することを想定して使い勝手が考えられていましたね。一方で、中央部のお堀通りと名付けられたコリドーに、利用者の振る舞いが滲み出ているとよかったなと感じました。

■空間と機能の関係について

村上：延藤安弘先生がまとめられた、市民が望む機能は詰め込まれていましたが、それぞれの機能が部屋ごとに分節されており、お堀通りへの滲み出しが感じにくく、やや閉鎖的に思えました。

伊藤：コンセプトは、大きなワンルームのボックスに、市民が必要とする様々な機能が配置されているというものです。

村上：ワークショップを通して機能を選定するところまでは成功していますね。図書館と施設名称がついていますが、例えば“伊東豊雄“のせんだいメディアテークのような、機能を限定しない多機能な建築を実現しようとした思いが伝わってきます。一方で、建築構成、機能配置にもう少し工夫があると、賑やかな内部空間となっていたのではないでしょうか。

伊藤：延藤安弘先生の言葉を借りるなら、街の縁側のようにみんなが溜まれるような場所を生み出したかったのではないかと思いますね。この施設をつくる構想が練られた時点の時代性もあるのかもしれません。以前ならば、施設をつくるという目標に向かって計画が始まっていましたが、現在であれば、空間をシェアすることや、ラボラトリーというよりもファクトリーとして設計するような、共有する空間が連続するように計画されていたでしょう。

村上：それは外観にも現れていますよね。透明性を確保した、せんだいメディアテークの事例に対して、かっちりと内外を分けて計画している。やはり建築的に見ると、街への透明性・連続性は低いと思います。

恒川：お堀通りと呼ばれる内部空間のコリドーを、都市の中の通りに見立て、内側のお堀通りに機能を開くことがメインコンセプトではないでしょうか。それを強調するためにあえて建築の外形は真四角に閉じて、東西南北の通りを強調し、その通りに対して開いていくという点は、上手くつくられていると感じます。ホールが奥まった場所に位置し、間に緩衝となる空間を用意していることは良い計画ですが、お堀通りに対して距離ができて、ホールでの賑わいが滲み出てくるようには思えませんでした。なので、エントランスからみて最も目立つ連絡ブリッジに、ホールの場所を示すためのサインが露出していましたね。日常的に利用者の行為が滲み出る空間として感じていないと思われます。

■図書館について

村上：図書館の機能としてはいかがでしたか。

伊藤：行ってみてよかった点は、ハイサイドライトが内部空間に絶妙な光を落としていたところと、天窓が書架と通路の間で計画されていて、気持ちの良い光で図書館内部が満たされていたところです。

村上：そうですね。実際に見てみて、たくさんの利用者が各々好きな居場所を見つけて、各々の過ごし方をしているという風景から、市民に愛された建築であることがはっきりとみて取れました。

伊藤：実際、利用者数が年間 150 万人（＊1図書館交流プラザりぶら 利用状況）となっていて、土日祝日では人が入りきらないくらいに溢れているようなので、市民参画で積み上げてきた提案の価値も明らかになりましたね。市民の居場所がたくさん詰まっていることにおいて、近年の公共施設における好例となっています。

恒川：以前あった図書館（＊2岡崎公園北側 1923-1945、岡崎市明大寺町 1971-2008、現在地 2008-）が、施設が狭く老朽化も進んでいたことから建て替えていると思うんですけど、建て替え時に大規模化したということもあります。また、図書館の機能だけでなく、ホールやジャズミュージアムや会議室などを盛り込んで市民みんなが集う場所とするつくり方は、現在はそのような事例が増えてきていますが、以前は少なかったのではないでしょうか。岡崎市がそれなりにリッチな自治体ということもあり、早い段階から計画できていたことから、先進的に取り組もうとする意欲や、実現に至るまでのプロセスに自治体の力をすごく感じましたね。

■地域性について

村上：岡崎らしいコンテンツとしてよかったものなどありますか。私は内田修さん（岡崎市出身のジャズ愛好家）のジャズミュージアムを中央にしっかりと設けている点ですね。従来の図書館にはない特徴だと思います。

恒川：ジャズミュージアム部分の壁面だけが“モンドリアン”のように装飾されていましたね。

村上：ジャズミュージアムこそ、お堀通りににじみ出るべきコンテンツではないでしょうか。

伊藤：ジャズミュージアムの空間は、箱の中にさらに箱を設けているように感じてしまいます。せっかくのコリドー空間なので、利用者がお堀通りを上から見下ろせるような場所があってもよかったですね。3階の会議室に訪れた際に、初めて全体像をつかむことができました。エントランスから高低差をつけて、川上に向かっていくような面白さを演出している点などを、図書館の中から見下ろせてもよかったと思います。

村上：もう少しだけ付け加えると、恒川先生は真四角な外形によって内部空間が外部と分節していると言われていましたが、景観や視界だけでも良いので、所々にある外部への抜けと合わせて、中の東西南北 2 つの通りと外部とのつながりを岡崎城をりぶらから望められるなどでうまく強調できるとよかったですね。

伊藤：結果的には周辺の建物に遮られていましたね。

村上：建物が邪魔していました。RC 打放しの面白い建物ではあったのですが。

恒川：ただあの通りが由緒ある軸線なので、場所を変えることができなかったのではないでしょうか。その後岡崎市はまちなみ保存（＊3ビスタライン）の際には岡崎城が見えるように配慮するなど定めているので、当然意識して計画されていたはずです。

伊藤：ともあれ岡崎のまちは市民参画しまちづくりを行う機運が高まっていて、りぶらを計画する以前の市民参画の行為が、基盤となっていると感じますね。20 年、50 年と長い目でみると、意義のある建築だと改めて感じます。

恒川：NPO 法人岡崎まち育てセンター・りたのような、岡崎のまちづくり NPO がリブラの運営を行なっていました。今でこそ全国に広まっていますがが、NPO や市民団体が公共施設の運営を行うというのは、まちづくりにつながる要素だと思います。また今後、人道橋を渡って市役所へと抜けていく通りに、徳川四天王像を設置する計画があるそうです。

伊藤：恒川先生はそれについてどのようにお考えですか。

恒川：名古屋でも、歴史上の偉人像が設置されている場所がありますが、それ自体が新しい岡崎らしさだと言われてしまうのは危険ですね。りぶらは、それとは異なった岡崎らしさを出そうとしているのかもしれません。

伊藤：駅の計画をしていると、駅前にオブジェや山車など、何かを置くことが良しとされている場面をよく目にします。ですが、建築家には何かを置くという発想はなく、むしろ空間としてどのようにらしさを表現するのかで力量が問われていると考えます。そういった視点に立つと、りぶらは建築として岡崎らしさを体現していないかもしれませんが、伊賀川を見せる、岡崎城を見せるなど、建築家による誇張表現や個人的表現だけでなく、周辺環境とうまく調和していくという意味において、岡崎らしさを醸し出していると感じています。

■将来像について

村上：伊藤先生は図書館の将来についてどのように考えていますか。絶えず増え続ける書籍で空間が圧迫されていく現在の図書館で、紙でつくった書籍を本棚に並べるということが、どのようなメディアツールとして位置付けられるのか、真剣に考えるべきだと思いますが。

伊藤：もし私が設計するのであれば、りぶらのように様々な機能で軸をつくりつつ、図書館は階段の一部分や縁側のようなスペースでコーナーとして設けますね。貸し借りは入り口で行うようにすれば、建物の中にさらに図書館が存在するのではなく、様々な機能と図書コーナーが滲み合う新しいかたちの図書館になると思います。

村上：機能としての図書館ではなく、1 つのツールとして本が存在するようになりますね。

恒川：武蔵野プレイスがそのような形式をとっていますね。1階玄関にセキュリティを設け、入館するとカフェも生涯学習支援も、図書館もあります。実際はそれぞれ管理が分かれていますが、図書館だけが箱として囲われず建物として一体的な空間のつくり方の方が、時代の潮流に合っていると思います。岐阜の“みんなの森ぎふメディアコスモス”も同じような計画です。

村上：りぶらも、35 年後に大規模改修する際は時代が変わっているので、そのようなつくり方に工夫できる余地はあると思います。

恒川：現在のりぶらでは、お城通りを軸にして子ども向けの図書館と大人向けの図書館がガラス面で分離しており、上部だけガラスがなく空気的に繋がっていました。空調のことを考えても、一体的に使える可能性は大いにありました。

村上：そのような使い勝手について、市民のリクエストによって変変更可能な余地を残している良い建築だということですね。

恒川：お堀通りやお城通りに、椅子やテーブルがもう少し置かれていれば、利用者の賑わいが滲み出ていたと思います。

伊藤：3階について、会議室の隣にあった小さなスペースをもっと設けて、テラスに出ることができればよかったですね。

村上：建築にとっての岡崎らしさとは何か、すごく考えさせられましたね。通りを軸とした構成は一般論なので、日本あるいは世界が積み重ねてきた建築の知恵であったり、岡崎の気候風土、文化が培った建築の歴史だったり、そういったものがもっと強調されてもいいと思います。

＊1　岡崎市統計ポータルサイトより（りぶらの利用者数）

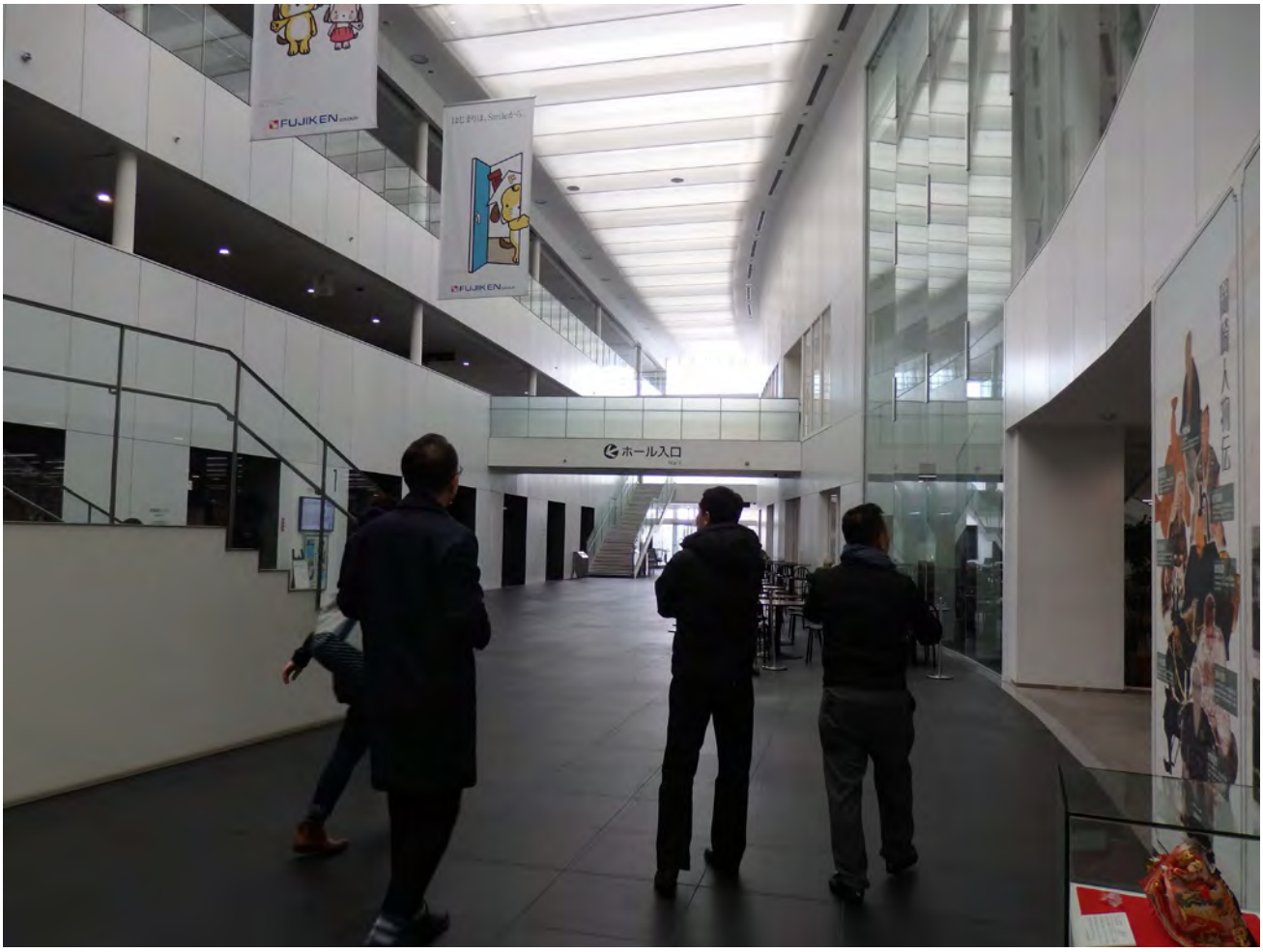
http://webhp.city.okazaki.lg.jp/tokei-portal/toukei_search.asp?kensaku=1&jouken=%8B%B3%88%E7%81E%95%B6%89%BB%81E%8A%CF%8C%F5

＊2　岡崎市立中央図書館

https://ja.wikipedia.org/wiki/岡崎市立中央図書館

＊3　岡崎市内の「歴史的景観」

http://www.city.okazaki.lg.jp/1100/1184/1169/p006107_d/fil/report.pdf



東岡崎駅ガレリアプラザ

時間：14:00-14:30　天候：曇り

■第一印象について

伊藤：瀧光夫先生がデザインしている駅広場の空間です。屋内にするでもなく、屋外にするでもなく、いろんな行為を誘発する事を仕掛けている空間だと思います。ある意味ランドスケープ的にもなっていて、雨がかりもあり、機能性としてはよいと思うのですが、先生方いかがでしょうか。

恒川：反対側がメインの駅表で、こちらは駅裏ですね。道路も合わせて整備することで一体的な計画となっています。ただ、この広場自体はデザインされていますが、自転車置き場や駅ビルが周囲にあり景観が整っていないことや、東岡崎駅へは広場から地下へ降りないといけないところからつながりが感じにくいですね。この広場と周辺環境につながりが見えにくいことが気になりました。

村上：駅広場にジャズが流れているのがいいですね。岡崎らしさが感じられます。また地下から広場に上がり、バス停に至るまでの動線が、明快なつくり方でした。バスが来るまでの待ち時間を、この広場で過ごしてもらいたいという意図が感じられます。

■素材感と使われ方について

伊藤：素材感をうまく引き出している広場であるとも感じています。主にコンクリート、石が用いられていますが、コンクリートでは素地で見せる部分、研っている部分、型枠の模様をつけた部分など、石では艶っぽく見せる部分、ピンコロ石で見せる部分など様々ありました。水盤や木々なども生かしながら、素材感によってランドスケープをつくろうとしているのが見て取れます。

村上：ピンコロ石は効いていましたね。

恒川：岡崎は石が採れる場所でもあるので、様々な石を使い分けているのは岡崎らしさを纏っていると言えるのではないでしょうか。水盤なども気持ちよいのですが、つくり込み過ぎていると感じます。もう少し広場としてのゆとりがあれば、広場の行為について禁止事項を掲示せずに利用することができたのではないでしょうか。

村上：それは計画した建築家の問題というよりも、この広場を使用管理している人の問題かもしれないですね。販売や飲食、音楽やダンスなど、利用者の行為も禁止してしまうとこの場所の良さが半減してしまいます。岡崎はジャスの街なのに。

恒川：この広場でジャズライブをやってもらいたいですね。周りに人が集まってきて、物販などで盛り上がりそうです。

村上：販売も禁止なので、市場やマルシェも開催できないのは勿体無い。もしそのような行為を許可するのであれば、メザニン（中二階）を設けてゆったりできる上階を生み出し、広場をアクティブに利用できる場所として分けるような計画もできましたね。

恒川：その後、大理石の椅子の上にさび石が載せてありますが、これは寝転がる人やスケートボードを行う人の抑制のために後から取り付けたものでしょうね。それは少し残念ですね。

村上：石の使われ方もありますが、植えられている樹木についても、現在植えられている低木ではなく、三河の木であるクロマツがよかったかもしれません。上に突き抜けるように成長する高木の下で、利用者が憩うイメージになる。広場の時間が、木々の成長とともにデザインされるのではないかと思います。

■広場空間について

伊藤：また上部のみガラスの垂れ壁を設けていることで、屋内外をうまくつなげながらも広場空間を生み出していますね。幾何学で建築を組み立て、オブジェクトを配置し、過剰にシンボライズさせず木や水盤、石に留めているところも、時代性が投映されているのではないでしょうか。

村上：確かにオブジェクティブですが、全てが同じレベルでの建築操作になっていますね。もう少し立体的に構成されていると、広場の使われ方にも多様性が生まれたと思います。

恒川：地下にある駅自体が地上に持ち上げられるなどされれば、この広場の在り方も大きく変わるかと思います。

村上：恒川先生のお話に関して、外部からのアプローチにおいて、ガラスの垂れ壁に周囲の景色が映り込みますよね。その映り込む景色が美しいことがこの建築をさらに活かすキーポイントであり、この建築の良さでもあります。今は立体駐車場が写り込んでしまっているので、この良さを活かすことが周りに波及していくと良いですね。

■時代性について

伊藤：午前中に視察した愛知産業大学言語・情報共育センターも、ガレリアプラザと同じように半屋内外と連続して周囲の景観との関係を創り出していく建築ですね。加えて、2 つの建築にはおよそ 15 年の差がありますので、それぞれの時代背景の中で建築の考え方も異なっていると考えるべきでしょうか。

村上：伊藤先生の考えをお聞かせください。

伊藤：東岡崎駅南口広場ガレリアプラザは幾何学を用いて建築のかたちを主張していて、愛知産業大学言語・情報共育センターは、ニュートラルなグリッド割を用いてランドスケープと調和し、全体として建築が景観に溶け込むような事を考えていると思います。

恒川：瀧光夫先生はどのような系譜で建築設計をされていたのでしょうか。

伊藤：何を専門にされていたかにもよりますが、テクストとコンテクストを読み込み、幾何学を用いて一つ一つのかたちに意味を持たせ抽象化し設置している点において、ニュートンリング（設計：若山滋）と共通点を感じます。

村上：その時代ですね。

伊藤：コロンビア大学大学院を修了されていることも、設計に影響していると思います。“ベルナール・チュミ”のように感じる部分もありますね。

東岡崎
みんなできれいなまちづくり